



大いなる可能性、広がってます!

総務省 自治行政局 選挙部 選挙課 課長補佐

土屋 直毅

Naoki Tsuchiya

平成 14年 4月 総務省採用
同 自治財政局財務調査課
平成 14年 10月 宮城県総務部市町村課
平成 15年 4月 同 財政課
平成 16年 4月 外務省経済協力局国際機構課
平成 16年 8月 同 開発計画課
平成 18年 4月 総務省自治行政局自治政策課
平成 19年 4月 同 公務員部公務員課
平成 20年 4月 千葉県総務部市町村課主幹
平成 21年 4月 同 商工労働部産業振興課長
平成 23年 4月 同 環境生活部環境政策課長
平成 24年 4月 総務省大臣官房企画課課長補佐
平成 25年 1月 同 消防庁予防課課長補佐
平成 25年 7月 同 自治行政局公務員部公務員課
給与能率推進室課長補佐
平成 27年 5月 同 自治財政局地方債課課長補佐
平成 28年 7月 現職

15年ほど前、広く人の役に立ちたい、地元貢献もできたらいい、そして、人間的にも成長できるような様々な経験ができないか…、こんな漠然とした、はたして両立するのかも分からない欲張りな思いをもって就職活動をしたのが当時大学生だった私でした。

そんな私が総務省を選んだのは、国家公務員として国の制度設計に携わるのみならず、地方公共団体において地域の課題に向き合い、マクロ・ミクロ両面からこの国の課題に最前線で取り組めること、分野の縛りなく様々な業務に携われる可能性に魅力を感じたこと、そして、このようなキャリアを積んできた先輩方の知見の広さと懐の深さに刺激を受けたことでした。

民主主義の根幹を支える

私は今、選挙制度を担当する部署にいます。選挙は国民が政治参加する重要な手段であり、民主主義の根幹をなすものです。それゆえ、民意が的確に反映され、また、多くの人にとって投票しやすい環境を整備していく必要があります。

昨年行われた参議院議員選挙は、70年ぶりに選挙権年齢が18歳以上へ引き下げられて初の国政選挙でした。また、一票の較差是正のため都道府県を「合区」して選挙区を設けたという大きな変化もありました。変化があれば課題も生

じます。若年者の選挙への関心をどう高めるか、高齢社会において投票しやすい環境整備をどう図るか、地域の声が国政にも届く制度になっているのかなど、考えることは尽きません。

先人たちが苦勞の末に実現させてきた政治参加の仕組みに、現代の視点から必要な修正を施し、後世に引き継いでいく。身の引き締まる思いです。

地方での経験を活かして

地方制度を所管する総務省では、地方公共団体での勤務を通じて課題の最前線を経験します。採用後すぐの宮城県では、財政課で警察本部の予算を担当し、限られた予算をどう配分するか、県警の方と時に夜遅くまで議論しました。仙台市随一の繁華街の基幹交番を予算化したのもこの時でしたが、後に実際に安心安全に貢献しているのを見ると、苦勞をはるかに超える充実感を覚えます。管理職をした千葉県では、産業振興、環境政策の担当課長として、リーマンショック後の中小企業対策、東日本大震災後の放射線量への不安がある中での土壌・水質対策など、人々の生活に直結する課題に取り組みました。

こうした経験は国で生きてきます。制度は執行主体である地方でうまく動かなければ意味がありません。地方が置かれる状況や思い、地方公

共団体の意思決定プロセス、地方が責任をもって判断できる範囲など、実情を理解していればこそ、国の制度が地方で無理なく動かすか判断できるのです。何より、一緒に働き、お世話になった地域の人たちを思い浮かべれば、恥ずかしい仕事はできないと駆り立てられます。

総務省の果てない可能性とともに

このパンフレットを手に行っている皆さんは、就職という重要な選択を控えておられると思います。仕事を選ぶことは自らの多くの時間を費やす先を選ぶことでもありますよね。

総務省では、国で政策の最前線に立つのももちろん、国内外のどの地域でどんな経験ができるか予想もできない、こんなわくわくするキャリアパスが待っています。自分の時間を捧げる価値が十二分にある職場です。果てない可能性を持った総務省で、皆さんと一緒に働ける日を楽しみにしています。



森田健作千葉県知事をお支えして

土台を支える仕事

みなさんと行政はどうかかわっているでしょうか。上下水道、ごみ収集、公立学校、年金給付…、考えれば考えるだけ答えは出てきますが、こういった行政サービスをみなさんに直に提供しているのは、ほとんどが地方自治体です。

市町村には、その市町村に住んでいる人の氏名、生年月日、性別、住所、世帯情報などが記載されている住民票を編成した住民基本台帳が備え付けられており、市町村が様々な行政事務・行政サービスを行う際に利用しています。住民基本台帳がきちんと備え付けられているおかげで、市町村は行政サービスを提供すべき住民がどこのだれなのかを知ることができます。一見地味に見えるかもしれませんが、この国全体の行政が円滑、適正に実施されるための、日本の人々の日々の生活が平穩無事に営まれるための土台として存在しています。

この土台となる制度について考えているのが、私の所属する住民制度課の重要な仕事の1つです。平成27年10月5日からはマイナンバーが住民票の記載事項となり、マイナンバー制度の根幹を支えるという仕事も新たに加わりました。これまで以上にこの国の行政の土台を支えるという意味合いが強くなりました。

人々のためになるのだろうか

総務省の地方自治分野の仕事は、地域や地方

自治体に関する行政、財政、税制などの観点から、その地域や地方自治体のあり方を考え、土台を支える仕事です。霞が関の省庁が考える事業（やそこに込められた想い）の多くは地方自治体を通して人々に届けられます。地方自治体のあり方を考え、土台を支えるということはその先にいる人々のことを常に念頭に置かなくてはなりません。本当に人々のためになるのか…、これが総務省の職員には強く根付いていると感じます。

総務省の職員には地方自治体へ赴任する機会が何度か与えられます。その度に、その地域にどっぷり浸かり、その地域を肌で感じるのです。人から聞いた、本で読んだ、旅行した…といったことは違う、そこで過ごしてこそ得られるリアルな経験やそこで一緒に過ごした人からの期待が、その後の本省生活において人々のためになることは何だろうか考えるエネルギーとなります。

徳島へ赴任して

私は入省1年目から徳島県へ赴任しました。選挙啓発の担当者として、啓発イベントなどを通じ、小学生や社会人となったばかりの若者、ときには投票率向上を目指すグループと選挙や政治の在り方を考える機会は、1年前まで学生であった私が、行政側の担当としてリアルな意見を耳にした貴重な場となりました。

県予算の査定担当者として目の当たりにした、過疎地域の実情とその実情に対処するために行われる県の事業などは、霞が関に戻って時間が経つにつれてより強心に響いてきます。

普段は厳しい職場の上司からふと言われた、「本省ではもちろん、何年後に再びどこかの地方へ出た時には管理職としてしっかり活躍してほしいから、徳島でしっかり仕事を覚えてくれよ」との言葉に込められた私への期待は、仕事がつらい時期でも私を突き動かす原動力となっています。

プライベートでは、徳島といえば阿波おどり!という単純な発想で、徳島市内で活動している「連」に参加しました。1年以上練習し、踊りも板についてきた頃、あるイベントで披露した踊りを見た人から「君はもう徳島県人だ」と言われたことは、徳島という新たな故郷が認めてくれた言葉のような気がして、今では日本各地のこういった地域のために働けることへの嬉しさを感じます。



阿波おどりを踊る筆者

茨の道へ

地方で感じるリアルな経験や期待には、リアルだからこそ楽しいものや嬉しいものだけではなく、つらく、厳しい現実が多々あります。しかし、総務省の職員は、この現実を忘れず、日本全国のあり方を考え、その土台を支えなければなりません。まさに茨の道。みなさんと、いつか一緒に茨の道を歩むことができる日が来ることを楽しみにしています。



総務省 自治行政局 住民制度課 主査

稲垣 嘉一

Kaichi Inagaki

平成 24年 4月 総務省採用
同 自治財政局財務調査課
平成 24年 8月 徳島県政策創造部地域振興総局市町村課
平成 25年 4月 同 経営戦略部財政課
平成 26年 4月 総務省大臣官房秘書課
平成 27年 8月 現職

社会のため、人々のため